『ソシオロジカ』は創価大学の眼
―新紀要への統合に寄せて―

杉山　由紀男

手もとに『ソシオロジカ』第１巻の第１号と第２号がある。発行年月日は、第１号が1977年２月、第２号が１か月後の同年３月となっている。第１号執筆者として、まず《論文》では、新明正道、佐々木交賢、新井直之、《研究資料》の項目で木戸又一、山脇重雄、《研究ノート》には、樺俊雄、中西治（神奈川大学助教授）という錚々たる研究者が名を連ねている。因みに中西氏以外は本学教授である。加えて《消息》という巻末の記事には、新明正道教授『著作集』発刊並びに日本学士院会員就任（社会学者として初の同会員に選出された）、樺俊雄教授監修『マンハイム全集』完結、木戸又一教授北朝鮮を訪問、金主席と会談、以上３件の内容が紹介されている。

続いて第２号では《論文》の項目に、西村勝比古（神戸大学教授）、佐々木交賢の２人の研究者に加え、当時大学院修士課程に在学中の栗原淑江、大梶俊夫、そして（エーリッヒ･ハーンの論文の訳者として）前田利久の３人の本学１期生が執筆者となっている。《消息》では、４月から阿閉吉男名古屋大学教授、西村勝比古神戸大学教授、中西治神奈川大学助教授が本学に赴任する予定と紹介されている。

日本の社会学界を代表するような錚々たる大教授に交じって、修士課程の大学院生にも論文発表の場を提供している『ソシオロジカ』は、発刊の当初から、教員か学生かの立場の違いにかかわらず、誠実に研究を志す者をいわば同志として遇するリベラルな気風に溢れていたと言える。また、本学に赴任予定とはいえ、本学教員以外も論文を寄せている点にもその気風の一端がうかがえる。その『ソシオロジカ』もこの第47巻をもって歴史的使命に

新たな段階を画し、創価大学人間学会の新紀要に発展的に統合されることになった。まことに感慨無量である。

思えば、創価大学開学の年、そして文学部が英文学科と社会学科の２学科で出発した 1971 年。その秋 11 月に『文学部論集』第１巻、第１号が発刊されている。これが『ソシオロジカ』のいわば前身であるが、当時はまだ創価大学社会学会も英文学会もないことから、発行者は創価大学文学部になっている。社会学科の教員も多く執筆している。その「創刊の辞」に、当時の文学部長根本誠教授はこう記している。「思うに機関誌は、その大学の眼である。眼が如何に開いているか、研究の成果がどうあがっているか、その大学の活動と方向とがどうなっているかを知る坐標であり、大学の特徴を端的に示す図式となるからである。大学の高翔は機関誌の活躍にかかり、執筆者が余蘊を残さず務める所以の意味が諒解出来る。この形式からだけでも、機関誌は大学を高翔させる一翼である」と。

『ソシオロジカ』はまさに大学の眼として、就中創価大学の眼として、その時代の日本と世界の人間と社会と文化を見つめ、考究してきた。この 46 年間で延べ約 540 名におよぶ執筆者のその眼は、“人間は社会を成して共に生きていく”という事実と、そこから立ち上がる実にさまざまな現象と問題に、論文として、研究ノートとして、そして書評や資料紹介などとしてアプローチし、横には実に多様なトピックをとおして、縦には社会変動の歴史の観点から光を当て、闡明し、さらに深い次元への探究に挑戦してきた。そして、その眼は、やはり“共に生きる”ことが人間存在の真実であることを明らかにし、そのことを自他ともにしみじみ実感させてきたように思う。創立者池田大作先生は本学開学 50 周年にあたり、『創価大学 50 年の歴史』に寄せた発刊の辞の冒頭に「我等創価大学は、地球の平和共生の柱なり。我等創価大学は、生命の価値創造の眼目なり。我等創価大学は、世界市民の連帯の大船なり。･･･」と記している。『ソシオロジカ』はまさに創価大学の眼、すなわち「生命の価値創造の眼目」として、そして「地球の平和共生の柱」「世界市民の連帯の大船」となってきたと自負している。しかし、この“共に生きる”という人間存在の真実に真っ向から反する現実、人間と人間の、民族と民族の、国家と国家の分断が、グローバル化の裏面で今なお続いてい

る。ここに社会学研究がこれからも継続されるべき根本の理由があるように思う。

『ソシオロジカ』発刊の 1977 年、文学部社会学科の４年生だった筆者は、当時あった学費問題に関する活動に参加し、学問以外の活動に重点を置いていて、あまり真面目な学生ではなかった。しかし、その後大学院に進学し、そこで樺教授や新明教授、阿閉教授や佐々木教授などから学問を本格的に教わった。新明教授の研究室での授業中、新明教授の教え子であった佐々木教授が時々訪ねてくることがあった。その時の佐々木教授の様子には緊張感が漂い、いつも直立不動であった。佐々木教授のゼミ出身だった筆者は、佐々木教授の新明教授への畏敬の念と学問における師弟関係の厳粛と真剣勝負を感じた。一方で、阿閉吉男教授の授業は社会学研究を志す者の民主的にして自由な雰囲気に溢れ、まるで雑談のような語らいの中で、ジンメルやデュルケムやウェーバーについて大事なことを沢山学ばせてもらった。

また、当時の大学院生同士で定期的に研究会を開き、その成果を独自の雑誌 ***pêle-mêle*** に発表していった。不勉強だった私は、自分の発表の時は本当に大変で、前日は徹夜して臨んでいた。***pêle-mêle*** はフランス語のごちゃまぜという意味から名づけ、雑多で多様な関心をもつ社会学徒の研究成果を結集しようと意図してのものだった。皆が研究意欲に溢れ、やらんかなの意気に燃えていて、ここにも若き社会学徒の自由と民主の気風が横溢していた。そして、ささやかながら、四苦八苦して時代の問題と取り組んだ。しかし、その時代の問題は、時が経てば経つほど、新たに加わることはあっても、無くなることはないように思えてならない。

実際に、現代世界は常に新しい問題を加えながら、まさに激動している。社会学確立期のデュルケム、ウェーバー、ジンメルらが「アノミー」「行為の合理化」「生の悲劇」などのキーワードとともに提起した近代世界の解決されるべき深刻な課題は、今なお未解決のまま残されている。そして、２度の世界大戦と核兵器の出現、高度情報社会、グローバル化の光と影、少子高齢化などなど、当時の彼らが想像もできなかったような速度で新たな問題が立ち現われ、私たちに重大な課題を突きつけている。Z. バウマンが、「過去の経験に学んで、以前うまくいった戦略や戦術を採用するのは賢明ではな

い」（長谷川啓介訳『リキッド・ライフ』）と、まるで学問することが無意味であるかのようにまで表現する、変化して止まない流動的な世界がそこにはある。しかし、私たちがこの現実に取り組まなければならないことだけは、逆に確実である。

『ソシオロジカ』の名は表舞台からは姿を消すが、これまで激動の半世紀の間、時代の人間と社会と文化の実像を見つめてきた大学の眼、創価大学の眼としての矜持と責任は、創価大学人間学会の新紀要の深層を流れて、それを支え、そして一人ひとりの執筆者の文字となって姿を現し、「大学を高翔させる一翼」となることを確信している。そして、J. デューイが 100 年以上前に述べた次のこともまた、激動する現代世界にあっても、やはり不変で普遍であるように思う。曰く「社会とは、共通の線に沿い、共通の精神において、共通の目的に関連してはたらきつつあるが故に結合されている、一定数の人々ということである。この共通の必要および目的が、思想の交換の増大ならびに共感の統一の増進を要求するのである」（宮原誠一訳『学校と社会』）と。創価大学社会学会は、これから創価大学人間学会となって、ますます「思想の交換の増大ならびに共感の統一の増進」に向けて新たな歩みを続けていく。